一九五〇年代東西ドイツの都市計画と住宅建設
――東ベルリン・フェンプール住宅団地計画に注目して――

芦部　彰

1　はじめに

本稿[1]は、一九五七年に立案された東ベルリンのフェンプール住宅団地計画をてがかりに、東西ドイツの都市計画と住宅建設にみられる共通点と差異を検討する。冷戦の最前線に位置するベルリンの都市計画や建築は、それぞれの体制のイデオロギーや理念を表象するものとして分析されてきた。なかでも、体制間競争の象徴として注目されてきたのが、東ベルリンのスターリン大通り（図1）と西ベルリンのハンザ地区（図2）である[2]。

東ベルリンのスターリン大通りは、一九五〇年七月の社会主義統一党（SED）第三回党大会の決定により、首都の中心を国民的感性に合致した建築で美しく造形し、東ドイツの都市計画と建築の模範を示すべく建設された。その指針は一九五一年一一月のベルリン国民建設綱領で示され、一九五二年二月に起工式が行われた。建築様式として、東ドイツ指導部は、コスモポリタニズムではなく「国民的伝統」を重視した。すなわち、モダニズム建築を形式主義として斥け、その一方で、ナショナルな独自性を示すものとして一九世紀のシンケル（Karl Friedrich Schinkel）の新古典主義との接続を意識しつつ、スターリン様式とよばれる社会主義的古典主義を採用した[3]。

これに対し西ベルリン市政府は、一九五三年にハンザ地区での国際建築博覧会インターバウ（Interbau）の開催を決定した。一九五六年の博覧会にあわせてハンザ地区を再開発し、それ自体を展示物として公開するとともに、博覧会終了後も実際に住宅地として使用するというプロジェクトであった。西ベルリン市政府は、スターリン大通りの建設に、モダニズム建築による都市空間の刷新を対置し、さらに、ドイツ人建築家だけでなく一四ヶ国から五三人の建築家を招くことで、その国際性を強調した。またモダニズムによる再開発に際しては、西ドイツの都市計画モデルとして、稠密な都市を否定し低密度化を進め、都市にその対概念とみなされる田園や農村の要素をとりいれる「分節化された開放的な都市（gegliederte und aufgelockerte Stadt）」や「都市農村世界（Stadtlandschaft）」の実現が試みられた[4]。

図1　スターリン大通り

図2　西ベルリン・ハンザ地区

スターリン大通りとハンザ地区は、それぞれスターリン様式とモダニズム建築によって代表され、対比的に理解されてきた。その結果、特に東ドイツの都市計画の歴史は、長いこと西側から隔絶された発展の歴史とみなされ、ソ連の方針の受容と、西側への対抗ばかりが重視されることになった[5]。その一方で、この図式におさまらない事例があることや、実践においては矛盾がみられることも指摘されている[6]。上記のスターリン大通りについても、工期による変化に目を向けると、これまでとは異なった見方が可能になる。というのも、一九五二年から五八年にかけて建設されたフランクフルト門からシュトラウスベルク広場までの区間は、スターリン様式で建設されたが、その後に建設されたシュトラウスベルク広場からアレクサンダー広場までの区間は、モダニズム建築に通じる様式で建設されているからである[7]。

本稿は、このスターリン大通りの工期による変化に注目し、都市計画と住宅建設における東西間の対抗の側面だけでなく、東西間で共有されていたものにも目を向け、そのうえで、どのような差異化が試みられたのかを考察する。近年の東ドイツの都市計画と住宅建設に関する研究は、東ドイツにおけるモダニズムの歴史に目を向けている[8]。その際に、一九五〇年代半ばの東ドイツと西側の接触が重視されており、本稿も、冒頭で述べた一九五七年のフェンプール住宅団地計画をてがかりとする。これは、東西両ドイツから同数の出品者と同数の審査員を集めた設計コンクールで立案された計画であり、こうしたものとしては、同時代において、初めてのそして唯一の試みであった[9]。以下では、スターリン大通りにおける建築様式の変化についてその背景を整理し、そのうえで、フェンプール計画案をめぐって行われた議論を通じて、東西ドイツの都市計画と住宅建設における共通点と差異を検討する。

2　東ドイツにおける都市計画と住宅建設の転換

スターリン大通りの工期による様式の変化は、このプロジェクトに限定されたものではなく、東ドイツにおける都市計画と住宅建設の基本方針が転換されたことを反映したものであった。その転換の契機となったのが、ソ連の動向である。一九五三年のスターリンの死後、消費財生産と生活水準の向上がより重視され、一九五四年一一月にモスクワで開かれた全連邦建築会議では、それまでのモニュメンタルな都市建設から離れ、都市計画と住宅建設においても経済性を優先する新たな方針が示された[10]。

このソ連の動きを受けて、同年一二月、東ドイツでも都市計画と住宅建設の方針が転換され、スターリン大通り着工時の「国民的で、美しく、大規模に」建設することよりも、合理的で効率的な建築が重視されることになった。翌一九五五年四月には、ベルリンで「より良く、より早く、より安価に建設する！」を標語に掲げた第一回建築会議が開催され、基調報告を行った建設省のコーゼル（Gerhard Kosel）が、国有建設企業、建築アカデミー、各地の大学の代表に対し、建築の工業化、すなわち、規格化された建築部材を大量に生産加工し、現場で部材を組み立てるプレハブ工法の推進を今後の課題として提示した[11]。なお、このコーゼルは、戦間期にベルリンのシャルロッテンブルク工科大学でタウト(Bruno Taut)に建築を学んだのち、ソ連に亡命して建築や都市計画の様々な分野で実務経験をつんだ人物で、一九五四年一〇月に建築アカデミーの求めによって東ドイツに戻り、建設省で指導的な地位についていた[12]。

この一九五四年の転換には、ソ連の動向だけでなく国内の社会情勢も関連していた。というのも、前年の「六月一七日事件」で、東ドイツ

政府は大規模な労働者蜂起を暴力的に鎮圧し西側世界から厳しい批判を浴びていたが、この労働者蜂起の発火点となったのがスターリン大通りの建設現場であったからである（図3）。スターリン大通りの建設は、合理化も試みられていたが手作業によって進められており、建設のコストは高く進度もゆっくりとしたものであった。その結果、左官職人など建設労働者の労働ノルマが引き上げられ、これを契機として労働者の蜂起が発生し、さらに東ベルリン全体へと広がり大規模化した。こうした国内的な背景からも、建築の工業化は重要な問題であった[13]。

この転換を受けて、東ベルリンの都市計画責任者としてスターリン大通り建設に深く関与してきたヘンゼルマン（Hermann Henselmann）は、一九五五年六月、『ゾンターク（Sonntag）』紙に「建築アカデミーの自己批判」と題する論説を発表し、スターリン大通りについては、着工済みのフランクフルト門を完成させる一方で、他の箇所については異なる様式で建設することに言及した[14]。さらに、西側諸国の建築家、都市計画家、建設技術者との交流が試みられ、特にパリ、マルセイユ、ルアーブルなどフランスの都市が視察された。また、一九五六年七月には、建築アカデミー指導部が、ハンブルクの建築家グループの招待に応じ同地を訪問した。ヘンゼルマンは、この機会に東西両ドイツの建築家が参加する設計コンクールの着想をえて、帰国後、このアイデアがフェンプールで実現することになった[15]。

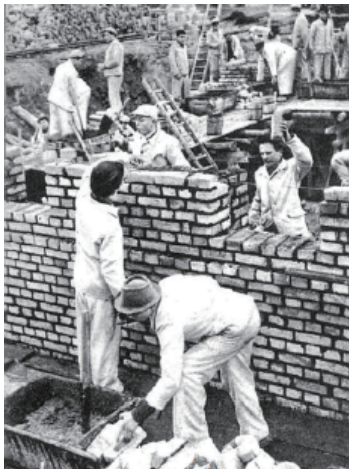

図3　スターリン大通り、レンガを積む建設労働者（1952年）

3　フェンプール住宅団地計画案

ハンブルク視察の二か月後、東ベルリンのリヒテンベルク地区評議会が「フェンプール周辺地域の住宅・保養地区」に建設する住宅団地の設計コンクール開催を決定し、同年九月一一日には、東西両ドイツの建築家を対象にその要項を発表した。計画の対象は七三・五ヘクタールの敷地で、そこに四四〇〇戸（人口一万七三〇〇人）の住宅と公共施設を建設し、住宅は規格化され工業的に建設可能なものであることが条件とされた。さらに、計画地域の構成として、四つの「住区（Wohnkomplex）」を設け、各住区の中心に学校、幼稚園・託児所、商店・飲食店などの施設を、また、計画地域全体の中心に、より大規模な商店、行政施設、図書館、集会所、青少年用施設、余暇施設、映画館、診療所・病院を設置することが求められた。計画案の提出期限は一九五七年二月二八日とされ、三月一五日に選定される計画案にしたがって、一九五九年に住宅団地を建設する予定であった[16]。もっとも、コンクール終了後の一九五七年夏に、西ドイツ政府が、東ベルリンの中心地域を計画地に含む「首都ベルリン」コンクールを開催したことで政治的緊張が高まり、結果的に計画案にもとづく住宅団地は建設されなかった[17]。

このように建物として実現することはなかったものの、本稿は、計画案をめぐって行われた議論に注目する。フェンプール・コンクールは、実際に、東西両ドイツから同数の出品者と審査員が参加して行われた。まず、参加者の人的構成はどのようなものであっただろうか。出品者は、東西ドイツから八名ずつ計一六名であった。このなかで注目される

のが、マイ（Ernst May）とライヒョウ（Hans-Bernhard Reichow）である。マイは、戦間期を代表するモダニズム建築家のひとりであり、フランクフルトで郊外住宅団地建設、住宅の合理化と規格化、そしてプレハブ工法を推進していた。世界恐慌の影響でドイツでの建築活動が困難になると、一九三〇年にはソ連に赴き工業都市の計画にかかわった。ナチ体制成立後は英領東アフリカに亡命し、一九五四年に西ドイツへもどると、ハンブルクに本拠を置くドイツ労働総同盟傘下の公益的住宅建設会社ノイエ・ハイマートで、「近隣住区」[18]を実践する住宅団地をてがけた。[19]ライヒョウは、戦後西ドイツの都市計画の指導的理念となる「都市農村世界」を一九四八年の著書で提唱した人物である。戦間期にはメンデルゾーン（Erich Mendelsohn）のもとで働いたのち、ドレスデンやブラウンシュヴァイクの建設参事官をつとめた。ナチ期にはグチョフ（Konstanty Gutschow）のもとで、「近隣住区」を「住宅団地細胞としての地域グループ」としてナチ党組織に位置付けたハンブルク都市計画に関わり、シュペーア（Albert Speer）の空襲被災都市再建委員会でも活動していた。[20]

審査員は東西ドイツから二名ずつ計四名で構成された。東ドイツからは、まず発案者のヘンゼルマンが審査員をつとめた。ヘンゼルマンは、「国民的伝統」と社会主義的古典主義によるスターリン大通り建設を主導していたが、その最初の建築は一九三〇年のレマン湖畔のケンウィン邸（Haus KenWin）で、ル・コルビュジェの影響を強くうけたモダニズム建築であった。ナチ期には様々な建築家のアトリエでスタッフとして働き、戦後には、そのうちのひとりであったハンブルクの建築家ニッセン（Godbar Nissen）を通じて、後述するヘーベブラント（Werner Hebebrand）など同地の建築家に接触することになった。[21]もうひとりの東ドイツからの審査員をつとめたのが、建築アカデミーの副会長コライン（Edmund Collein）である。コラインも、戦間期にバウハウスで学ぶなどモダニズムと関わりの深い建築家で、こののち、スターリン大通りの残った区間の建設にたずさわることになる。[22]

西ドイツから審査員に名を連ねたのは、ヘーベブラントとヒレブレヒト（Rudolf Hillebrecht）である。ヘーベブラントは、戦間期のフランクフルトとソ連で、マイのスタッフとして活動していた。マイが東アフリカに去ったあともソ連に留まっていたが、一九三八年にドイツへ帰国し、ザルツギッターのヘルマン・ゲーリング工場都市計画に従事したのち、シュペーアの空襲被災都市再建委員会で働いた。戦後は一九五二年から六四年までハンブルク市の建設局長をつとめた。ヒレブレヒトは、マイやタウトらモダニズム建築家に影響を与え、シュペーアの師でもあったテッセノウ（Heinrich Tessenow）のもとで建築を学んだ。ナチ期には、グチョフのハンブルク都市計画に関わり、その後はヘーベブラントと同様にシュペーア委員会で働いた。戦後は一九四八年から七五年までハノーファーの建設参事官をつとめた。[23]

このように、審査員や主要な出品者は、共通して戦間期にモダニズム建築を経験していた。さらにマイとヘーベブラント、そしてコラインにはソ連での活動経験があり、また西ドイツの建築家の間には、亡命していたマイを除き、ナチ期の活動の重なりを指摘できる。モダニズム建築を共通の基盤とし、その後、スターリン体制下のソ連、ナチ体制、亡命先の英領植民地と異なる条件に適応しつつ建築家としての活動を続けることになったものの、戦間期から大戦期にかけての人的結合は戦後も生き続けており、東西ドイツの政治体制の境界を超えたフェンプール・コンクールの開催を可能にしたのである。

計画案に目を転じると、審査員によって一等に選出されたのはマイ

案（図4）であった。選評では、「空間的な分節によって好ましい印象を与え」、さらに「緑地帯が豊かな効果を発揮している」ことが指摘された[24]。マイ自身も、「住宅地区全体を都市農村世界へと変え、町の中心に位置する緑地を体系的な分岐によって個々の住居にまで導く努力がなされなければならない[25]」と述べ、同時代の西ドイツの都市計画モデルである「分節化された解放的な都市」と、そのなかでの緑化による「都市農村世界」の実現を計画案の基本構想としていた。

そのうえで、個々の建物の建設については「住棟を、規格化建材の組み立てによる現代的な建設に配慮して造形」し、「それぞれの建物に、クレーン走行レールを用いて効率的にアクセスできる」ことを企図していた[26]。プレハブ工法を前面にすえることは、東ドイツ側の関心にこたえるものといえる。さらに、これに関連して注目されるのが、「防水の外面をそなえた発砲コンクリートのプレートを用い、外壁モルタルの塗装は行わないことを提案する。これによって、かなりの節約を達成できるだけでなく、接合部が目に見えることで、表面構成の基準となる[27]」と述べていることである。これは、あえてプレートの接合部を塗装で覆わず、プレハブ工法で建設されたことが一目でわかるようにする提案であり、実際の建物でその成果をわかりやすく示す狙いを読み取ることができる。

図4　マイのフェンプール計画案

西ドイツの建築家が一等に選ばれた結果に対しては、多くの論評がよせられた。そのなかには、こののち建築アカデミーの理論部門で大きな役割を果たすシュミット（Hans Schmidt）の評もあった。このシュミットも、コンクールの参加者と同様に、一九二八年の近代建築国際会議（CIAM）設立に加わるなど戦間期のモダニズム建築と関わりをもち、マイとはソ連で活動をともにしていた[28]。その論評では、コンクールに提出された東ドイツの建築家の計画案が、西ドイツの建築家の計画案と区別がつかないほど似ていることを指摘したうえで、「社会主義的都市計画」はいまだ発展途上であり、その発展を「西側の都市計画の経験を手がかりに進めたとしても、それは間違いではない」と、西側の都市計画を参照することに言及している[29]。しかし、ここで重要なのは、同時に西側の限界も指摘し、そこから距離を保つ姿勢を示していることである。すなわち、「我々が西側の都市計画の否定的な現象のもとに留まる場合」、それは「本末転倒」であるという。そしてマイの計画案についても、「我々の建築家に対し、好ましい方向を示したという長所がある」が、「このことと、彼のプロジェクトが、資本主義的都市計画がはまり込んでいる限界を超えていないということは矛盾しない」ことを強調している[30]。

それでは、東ドイツの都市計画と建築において、西側を参照しつつ同時に差異化が試みられたものとして、どのような論点があったのだろうか。マイの計画案は、合理的なプレハブ工法を推進する点で、一九五四年の転換以降に東ドイツで重視された建築の工業化と整合的であり、いわば東ドイツ側の関心を先取りしたかたちで、この過程をさらに推し進めるものであった[31]。その一方で、計画案全体の基本構想は、「分節化さ

れた解放的な都市」と「都市農村世界」という西ドイツの都市計画モデルに則ったものである。マイの計画案に対する選評で、空間の分節化と緑化が肯定的に評価されていたが、同時代の東ドイツの都市計画において、都市を分節化する単位とその性格をめぐって、どのような議論がなされていたのだろうか。

4　東ドイツにおける「住区」をめぐる議論

フェンプールの計画案が満たすべき要件として、対象地域に四つの「住区」を設けることが求められていた。マイは、一九五七年一一月の小冊子でフェンプール計画案を紹介し、この四つの「住区」を「近隣住区」として示している[32]。また、フェンプール計画の要件をみると、人口の規模や通過交通の排除、さらに、各「住区」と計画地全体に、住宅だけでなく学校や店舗などの施設や緑地を配置することを求めるなど、その内容は「近隣住区」とほぼ同じ内容ということができる。

しかし、シュミットは、一九五八年の論説で「住区」を「近隣住区」と区別し、「ソ連の社会主義的都市計画が生み出したもの」と明確に位置付けている。すなわち、「もともとロシア語の『街区（Quartal）』は、四方を通りに囲まれた四角い家屋群を示すもので、碁盤目状のロシアの地方都市における基本単位であった」が、「ソ連の都市計画の理論と実践の発展とともに、『街区』は、より大きな都市計画上の単位の呼称となった。これは、住宅とそれに付属する公共施設を含むもので、我々の住区に相当する」とし、「住区」をソ連の都市計画の系譜に位置付けている[33]。その一方で、「西側の都市計画は、それまで彼らに知られていなかった住区概念を、一九三〇年以降に初めて取り入れた」が、「大都市の解体を目指す『近隣住区』をつくりだすことで、正反対のものへ変化させた」と述べ、「近隣住区」を否定的な評価とともに西側世界に属するものと位置付けている[34]。シュミットの議論では、「街区」はソ連の都市計画が「近隣住区」に先行して発展させたものであり、「住区」もまた、「近隣住区」とは系譜の異なる概念ということになる[35]。以下では、この議論をふまえ、東ドイツの都市計画において「住区」がどのように解釈されていたのかを整理することで、東西ドイツの都市計画の共通点と差異を考えたい。

東ドイツにおいて、「住区」は、一九五〇年七月に東ドイツ政府によって決議された「都市計画の一六基本原則」の第一〇項目に掲げられていた。この原則は、同年四月にソ連の都市建設省から、東ドイツの政治指導部と建築家に対し提示されたものである。これ以降、ソ連の経験に基づくこの原則から、都市計画において実際の指針となる「住区」理論を発展させることが東ドイツの建築家、都市計画家の課題となった。この過程で画期となったのが、一九五三年に建築アカデミーのユングハンス（Kurt Junghanns）が提示した「住区」モデルである（図5）。このモデルに基づいて、翌五四年には都市計画の指針として『都市計画の要素としての住区』が刊行された[36]。

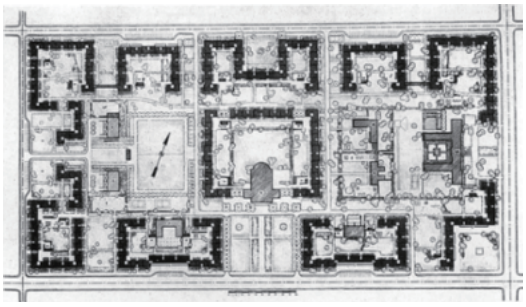

図5　ユングハンスの「住区」モデル

ここでユングハンスは、「住区」の機能として、「住宅地を開放し

(auflockern)、最大限に緑化し、十分な日照の住居を静かな環境のなかに創出する」とともに、「公共施設を合理的に配置して、そこへの距離を短く保つ」ことで、健康的な住居を提供し、社会生活への参加を可能にすることを挙げている。[37] しかし、これは「近隣住区」も同じであり、「開放する(auflockern)」という語彙も同時代の「分節化された開放的な都市」という西ドイツの都市計画モデルと共通するものである。

こうしたなかで、「近隣住区」から「住区」を差異化する際にユングハンスが強調したのが空間の境界線の意味であった。すなわち、西側の「近隣住区」は、「小さな孤立した家屋群を用いて密接な隣人関係を発展させることで、社会意識の崩壊と人間の社会的孤立に対抗しようとする」が、「住区」においては、「これとは反対に、都市のあらゆる部分を生き生きとした統一体へと統合し、個々の住民を都市全体と関係付けること」が基本理念であり、「それゆえ、境界となる通りや広場は分断線ではなく、住区と住区を、そして〔住区の上位に位置する単位である〕住宅地区と住宅地区を結びつける最も重要な要素である」ことを強調する。[38] このように、孤立した存在として描かれる「近隣住区」による分断に、全体へと結びつけられる「住区」による統合が対置された。

東ドイツにおける「住区」概念の発展にとってさらなる画期となったのが、一九五七年夏の西ドイツ政府による「首都ベルリン」コンクールであった。同年一〇月、この動きに対抗して、SED中央委員会が「住区」理論の改訂と東ベルリン中心部における「社会主義的住区」の建設を決定した。これを受けて、翌年五月にユングハンスの「住区」に代わるものとして、シュミットが「社会主義的住区」モデルを提示し(図6)、シュミット、コライン、コーゼルが中心となって編集した『社会主義的住区』が新たな都市計画の指針として建設省と建築アカデミーから刊行された。[39]

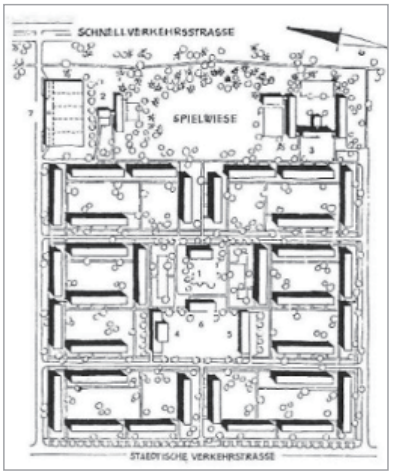

図6　シュミットの「社会主義的住区」モデル

シュミットが、「社会主義的住区」とこれまでの「住区」および西側の「近隣住区」との違いとして強調したのが、住区内部の建物の配置とそれによってもたらされる空間構成であった。まず、「社会主義的住区」では、「中庭の四方を全て建物で囲むような、かつての閉じられた建物の配置(geschlossene Bebauung)」が斥けられる。そのうえで、それに代わるものとして、「規格化された組み立て工法を用いることで、最も簡素な、周囲に建物が建てられていない構造がもたらされ、開かれた建物の配置(offene Bebauung)という原則への移行」が生じ、これによって「通りと街区の内部という空間的分離が消え、連続した空間が創出される」という。[40] つまり、住棟で囲まれた、閉じた空間がうまれるのを避け、内側と外側という分離が消えた空間の連続性を重視した建物の配置を、「社会主義的住区」の原則としたのである。図5と図6を比較すると、ユングハンスのモデルでは、長方形の住棟が交わり、隅が閉じられている箇所が複数生まれているが、シュミットのモデルでは、住棟が互いに交わることなく、独立して建っており、建物によって閉じられた空間が存在していないことがわかる。

さらに、この「開かれた建物の配置」と「連続的な空間」には、西側でみられる「住民の孤立」に対抗する社会意識をもたらすという意味

が付与された。その際に重視されたのが、社交組織との関係であった。すなわち、「社会主義的住区における住棟のグループ分けは、社会主義社会の政治的、文化的、物質的な生活にとってますます重要な役割を果たす、住宅地における社交組織の配置に従う」とし、それぞれ独立して建てられている住棟を、社交組織を通じて関係付け、まとまりを形成することが企図された[41]。

こうして「社会主義的住区」では、西側における「住民の孤立」との対比のなかで、社交と住民の連帯感を促進する社会性が強調された。社会性の強調は、ユングハンスの「住区」とも共通するが、ユングハンスが境界線の解釈を通じてそれを試みたのに対し、ここでは住区内の建物の配置が焦点となった。さらに注目されるのが、こうした建物の配置と空間構成が、「規格化された組み立て工法を用いることで、最も簡素な、周囲に建物が建てられていない構造がもたらされ」とあるように、建築の工業化と結び付いていることである。フェンプール計画案についてマイが述べていたように、プレハブ工法による建設では、組み立てクレーンや関連する機材のアクセスが重要であり、マイの計画案でも長方形の住棟が互いに交わることなく、並行に並べられていた（図4）。こうした工業化は、第一には、経済性の観点から求められていたが、ここでは、「閉じられた」配置と「開かれた」配置の対比とともに、住民の連帯感を涵養し社会性を支えるものへと、その意味が再解釈されているのである。

上述した一九五七年一〇月のSED中央員会では、東ベルリン中心部における「社会主義的住区」の建設が決定されていたが、その舞台となったのがスターリン大通りであった。シュトラウスベルク広場とアレクサンダー広場の間の空間について、一九五八年から五九年にかけて複数の計画案が立案されたのち、コラインとドゥチュケ（Werner Dutschke）の二つの草案が一つにまとめられた。この計画案は、スターリン大通りを挟んで北側と南側に一つずつ、それぞれ住民八〇〇〇人の「社会主義的住区」を建設するもので、一九五九年に建設が開始され、一九六五年に完成した[42]（図7）。その建設現場は、図8が示すように、クレーンを投入して規格化建材を組み立てるという、建築の工業化を示すものであった。こうして、図1と図7を比較してわかるように、シュトラウスベルク広場とアレクサンダー広場の間のスターリン大通りは、表面装飾のない長方形の建物が並び、冒頭で示したフランクフルト門とシュトラウスベルク広場の間のスターリン大通りとは異なる姿となった。

図7　スターリン大通り沿いの「社会主義的住区」

図8　スターリン大通り、プレハブ工法による建設（1960年）

5　おわりに

一九五七年に東西両ドイツの建築家が参加して行われたフェンプール・コンクールは、一九五四年の都市計画と住宅建設の転換後、課題となっていた建築の工業化に取り組む東ドイツの建築家が西側との接触を試みるなかで開催されたものであった。冷戦下にこうした東西両ドイツの建築家の交流が可能であった背景には、戦間期のモダニズム建築を共通の基盤とした人的結合があった。大戦期にそれぞれ異なる条件のもとで活動しながら、この人的ネットワークは戦後も機能していたのである。

フェンプール計画案をめぐる議論では、建築の工業化と、都市計画の単位である住区の位置付けの二点がテーマとなった。前者については、一等に選出されたマイの計画案が、東ドイツ側の関心を先取りしたかたちで、プレハブ工法を前面に押し出していた。建築の工業化という論点では、東側の西側に対する遅れの挽回という側面が目立つものであった。

その一方で後者の都市計画の単位としての住区というテーマでは、フェンプール計画案の前後の時期に、住区概念を東ドイツの都市計画のなかで独自に定義し、社会主義的な共同生活を体現する空間構成と、西側の都市計画との差異化が試みられた。その過程では建築の工業化の論点もとりいれられ、東側の独自性を打ち出そうとする姿勢が、前者の論点に比してより顕著であった。

こうした差異化の試みは、東西の対抗関係を前提としたものである。しかし、本稿がここまで検討してきたように、この対抗関係は全く異質なものどうしの衝突としてではなく、共通の基盤にたったうえでの対抗関係として理解すべきものであった。この点に関連して、フェンプール計画案の審査員のひとりであったヒレブレヒトは、一九七四年に東側諸国の都市計画と住宅建設を回顧して、モダニズム建築の影響のもとでの東西間の交流によって、政治体制の違いを越えて都市計画上の類似がもたらされたことを指摘している。[43] この指摘をふまえて、本稿の議論をふりかえると、東西ドイツの建築家が、ともにモダニズム建築に立脚しているからこそ、差異化が試みられなければならなかったと考えることができる。その意味で、一九五〇年代後半における東ドイツのモダニズムの特徴は、差異化のためになされた概念の解釈にこそあらわれているということができよう。

最後に、本稿の考察の射程と残された課題についてふれておきたい。本稿は、スターリン大通りの工期による変化を議論の出発点とした。そのため、社会主義的古典主義による建設が開始される以前の動向を十分に検討できなかったが、この時期にはシャロウン（Hans Scharoun）により戦間期のモダニズム様式でスターリン大通り沿いに集合住宅が建設されていた。[44] この点をふまえると、社会主義的古典主義様式の時期は前後をモダニズムに挟まれた時期とみることができる。本稿が注目した一九五〇年代後半の動向も、戦後直後にみられたモダニズムからの離脱をへて、再びモダニズムに回帰したものととらえることができる。実際に、フェンプール・コンクールを、戦間期のモダニズム建築の名誉回復と位置付ける研究もある。[45] もっとも、この見方については、戦後直後のモダニズムと五〇年代後半から六〇年代にかけてのモダニズムについて、どこまで同質であり、どのような差異があるのか、モダニズムのなかでの変化を社会的文脈と関連付けながら検討することが必要であるように思われる。この点については今後の課題としたい。

図版出典一覧

図1 Simone Hain, „Berlin Ost“, in: Klaus von Beyme u. a. (Hrsg.), *Neue Städte aus Ruinen*, München 1992, S. 47.

図2 Mark Escherich (Hrsg.), *Denkmal Ost Moderne*, Berlin 2012, S. 53.

図3 Gerhard Puhlmann, *Die Stalinallee. Nationales Aufbauprogramm* 1952, Berlin (Ost) 1953, S. 80, 90.

図4 Justus Buekschmitt, *Ernst May*, Stuttgart 1963, S. 131.

図5 Werner Durth / Jörn Düwel / Niels Gutschow, *Architektur und Städtebau der DDR*, Berlin 2007, S. 501.

図6 Johann Friedrich / Geist Klaus Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3: 1945-1989, München 1989, S. 398.

図7 Johann Friedrich / Geist Klaus Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3: 1945-1989, München 1989, S. 403.

図8 Andreas Butter / Ulrich Hartung (Hrsg.), *Ostmoderne. Architektur in Berlin 1945-1965*, Berlin 2004, S. 115.

注

（1）本稿は、第八八回社会経済史学会のパネル「冷戦期の住宅建設・都市開発――西ドイツとチェコスロヴァキア」での報告をもとに、加筆修正したものである。

（2）冷戦下ベルリンの都市空間の解釈について、Gabi Dolff-Bonekämper, „Einführung“, in: Gabi Dolff-Bonekämper / Hiltrud Kier (Hrsg.), *Städtebau und Staatsbau im 20. Jahrhundert*, München 1996, S. 10; スターリン大通りとハンザ地区を対比的に分析した邦語文献として、高橋秀寿「冷戦の境界ベルリンの空間形成」田中きく代・中井義明・朝治啓三・高橋秀寿（編著）『境界域からみる西洋世界』ミネルヴァ書房、二〇一一年、一二三－二四三頁。

（3）高橋、前掲論文、一二八－一三三頁；Thomas Topfstedt, „Wohnen und Städtebau in der DDR“, in: Ingeborg Flagge (Hrsg.), *Geschichte des Wohnens*, Bd. 5, Stuttgart 1999, S. 466-470.

（4）高橋、前掲論文、一三三－一三九頁；Johann Friedrich / Geist Klaus Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3: 1945-1989, München 1989, S. 360-383.

（5）Andreas Butter, „West und Ost im Ringen um den sozialen Stadtraum“, in: Christopf Bernhardt (Hrsg.), *Städtische öffentliche Räume*, Stuttgart 2016, S. 61.

（6）Dolff-Bonekämper, „Einführung“, S. 10.

（7）Thomas Topfstedt, „Die nachgeholte Moderne. Architektur und Städtebau in der DDR während der 50er und 60er Jahre“, in: Dolff-Bonekämper / Kier (Hrsg.), *Städtebau und Staatsbau*, S. 39-47.

（8）そうした研究として、注（4）の文献がある。Butter, „West und Ost“, S. 61-97; また同様の研究として、Mark Escherich (Hrsg.), *Denkmal Ost Moderne. Aneignung und Erhaltung des baulichen Erbes der Nachkriegsmoderne*, Berlin 2012; Andreas Butter / Ulrich Hartung (Hrsg.), *Ostmoderne. Architektur in Berlin 1945-1965*, Berlin 2004.

（9）Butter, „West und Ost“, S. 62; もっとも、ベルリン以外の都市では、西ドイツのゴスラーの計画に東ドイツの建築家が計画案を提出した事例もあった。より大規模なものとしては、ケルンの大聖堂前広場について国際コンクールが行われ、東側諸国の建築家も計画案を出品していた。ただし、これは広く東側諸国から参加があり、東ドイツに限定さ

れたものではなかった。首都ベルリンを舞台に、東西ドイツに限定し同数の参加者で行われたものとして、フェンプール・コンクールは独特の試みとして同時代の注目を集めた。Vgl. Butter, „West und Ost“, S. 67f.

(10) Topfstedt, „Wohnen und Städtebau in der DDR“, S. 486.

(11) Topfstedt, „Wohnen und Städtebau in der DDR“, S. 487; Simone Hain, „Berlin Ost: »Im Westen wird man sich wundern«“, in: Klaus von Beyme u. a. (Hrsg.), *Neue Städte aus Ruinen. Deutscher Städtebau der Nachkriegszeit*, München 1992, S. 48; Werner Durth, „Auf der Suche nach der neuen Stadt. Parallelen und Kontraste im deutschen Städtebau“, in: Dolff-Bonekämper / Kier (Hrsg.), *Städtebau und Staatsbau*, S. 34f.

(12) Werner Durth / Jörn Düwel / Niels Gutschow, *Architektur und Städtebau der DDR*, Berlin 2007, S. 466.

(13) Friedrich / Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3, S. 385.

(14) Durth / Düwel / Gutschow, *Architektur und Städtebau der DDR*, S. 470.

(15) Paul Sigel, „Positionsbestimmungen zwischen Ost und West“, in: Thomas Flierl (Hrsg.), *Der Architekt, die Macht und die Baukunst. Hermann Henselmann in seiner Berliner Zeit 1949-1995*, Berlin 2018, S. 174-177.

(16) Friedrich / Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3, S. 393.

(17) Durth / Düwel / Gutschow, *Architektur und Städtebau der DDR*, S. 478-480.

(18) 「近隣住区（neighborhood unit）」は、田園都市運動の延長上で、一九二九年にアメリカの都市計画家クラレンス・ペリーによって提唱された。小学校の校区を念頭に人口五〇〇〇人程度を単位とし、境界を幹線道路などで明示するとともに、区域内に公共施設や店舗、小公園や緑地を設け徒歩圏内で日常生活を可能にするものである。クラレンス・A・ペリー（倉田和四生訳）『近隣住区論』鹿島出版会、一九七五年。この構想は、都市生活を人間的スケールに戻し、草の根の民主主義をささえる共同体意識を育むことが目的であったが、伝播した地域の文脈のなかで実現されていった。本文でふれるように、ドイツでは、ナチ期に「民族共同体」を支える単位としても利用された。

(19) 拙稿「戦後西ドイツにおけるエルンスト・マイの住宅建設」『ゲシヒテ』一二（二〇一九年）、七一－八七頁。

(20) 高橋、前掲論文、一三六－一三七頁；ライヒョウの著作は、Hans-Bernhard Reichow, *Organische Stadtbaukunst. Von der Großstadt zur Stadtlandschaft*, Braunschweig 1948；ナチ期については、Butter, „West und Ost“, S. 76.

(21) Sylvia Claus, „Zwischen Modernismus und Historismus. Zu Hermann Henselmanns Architekturästhetik“, in: Flierl (Hrsg.), *Der Architekt, die Macht und die Baukunst*, S. 154-156; Butter, „West und Ost“, S. 70.

(22) Friedrich / Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3, S. 311.

(23) Friedrich / Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3, S. 393; Butter, „West und Ost“, S. 70f.

(24) Butter, „West und Ost“, S. 83.

(25) Ernst May, „Meine Lösung zum Wettbewerbsprojekt Fennpfuhl“, in: *Städtehygiene*, 12/1957, S. 249.

(26) May, „Meine Lösung zum Wettbewerbsprojekt Fennpfuhl“, S. 250.

(27) May, „Meine Lösung zum Wettbewerbsprojekt Fennpfuhl“, S. 251.

(28) その後、バーゼルやワルシャワをへて、一九五五年に東ドイツへ移住した。Friedrich / Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3, S. 394.

(29) Hans Schmidt, „Von der Schwelle des sozialistischen Städtebaus“, in:

Deutsche Architektur, 9/1957, S. 482.

（30）Schmidt, „Von der Schwelle des sozialistischen Städtebaus“, S. 482.

（31）Vgl. Butter, „West und Ost“, S. 84.

（32）Ernst May, *Die sozialen Grundlagen des heutigen Städtebaues*, o. O. 1957, Anhang: Berlin-Lichtenberg-Fennpfuhl.

（33）Hans Schmidt, „Der sozialistische Wohnkomplex als Architektur“, in: *Deutsche Architektur*, 6/1958, S. 324.

（34）Ebenda.

（35）これはシュミットの主張であり、「近隣住区」がソ連の都市計画にも影響を与えたとするものとして、Rosemary Wakeman, "Was There an Ideal Socialist City? Socialist New Towns as Modern Dreamscapes", in: Jeffry M. Diefendorf / Janet Ward (eds.), *Transnationalism and the German City*, New York 2014, p. 110.

（36）Durth / Düwel / Gutschow, *Architektur und Städtebau der DDR*, S. 500f.

（37）Kurt Junghanns / Felix Boesler, *Der Wohnkomplex als Planungselement im Städtebau*, Berlin (Ost) 1954, S. 11.

（38）Ebenda.

（39）Friedrich / Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3, S. 396, 398.

（40）Ministerium für Bauwesen / Deutsche Bauakademie (Hrsg.), *Der sozialistische Wohnkomplex*, Berlin (Ost) 1959, S. 3.

（41）Ministerium / Bauakademie (Hrsg.), *Der sozialistische Wohnkomplex*, S. 2.

（42）Friedrich / Kürvers, *Der Berliner Mietshaus*, Bd. 3, S. 396-403; なお、大通りの名前は、スターリン批判のなかで、一九六一年にカール・マルクス大通りに改められた。

（43）Rudolf Hillebrecht, „Zur Einführung“, in: Edmund Goldzamt, *Städtebau sozialistischer Länder*, Stuttgart 1974, S. 8.

（44）Hain, „Berlin Ost“, S. 35-37.

（45）Hain, „Berlin Ost“, S. 51.

（あしべ　あきら・東京大学講師）

◇◇◇